# 令和７年度学校評価（教職員による自己評価 および 関係者評価）

令和 ８年 ４月 ３日
静岡聖光学院中学校･高等学校

| | |
|---|---|
| 建学の精神 | カトリック的世界観にのっとり､人類普遍の価値を尊重する人格の形成､あわせて高尚かつ有能なる社会の成員を育成する。 |
| 重 点 目 標 | ①　生徒が地の塩・世の光の担い手となるために、積極的で自覚的な学院生活を送るよう呼びかける。<br>②　６カ年継続した進路指導･学習指導の体制を充実させる。<br>③　学校での学習活動(良質の授業および補習など)に加え、家庭学習の指導や保護者面談を通じて生徒･保護者の満足度を高める。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 評価基準(自己評価) | Ａ：十分に達成できた | Ｂ：おおむね達成できた | Ｃ：あまり達成できなかった | Ｄ：全く達成できなかった |
| 評価基準(学校関係者評価) | Ａ：十分に評価できる | Ｂ：おおむね評価できる | Ｃ：少し物足りない | Ｄ：評価できない |

| | | | ◆ 自　己　評　価 | | ◆ 学 校 関 係 者 評 価 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評 価 項 目 | 具 体 的 取 組 | 現 状（成 果）と 来 年 度 へ の 課 題 | 評価 | 評価 | 意 見･提 言 等 |
| 教務 | 【重点目標】【重点目標】・生徒が安心して学びに向かい、本校での学びに価値を実感できる環境づくり | | | B | B | ・個人に合わせ生徒のモチベーションを向上させるようなきめ細やかな指導を求める。<br><br>・定期試験を増やし、各教科会にて試験以外の評価ができることは良いことである。<br><br>・検証に基づくKPIの設定を進めて欲しい。 |
| | 観点別評価についての検証を行う。 | 三観点を踏まえた授業<br>定期試験の作問 | 定期試験を年４回から５回に増やしたことで、毎回の試験の有無を教科会の判断で決定できるようにした。（単位数に基づき年３回or年５回の実施を検討）これにより、試験のあり方や試験以外における評価についての議論が各教科で増えた。生徒の学習へ向かう姿勢の変化については、中長期的な考察が必要なため、引き続き検証をしていく。<br>観点別の評価方法について、教科会で平常点の開示を行い、定期試験以外の評価についての議論を深めた。<br>生徒にとってプラスになることを大前提として改善を検討していく。 | | | |
| | 51期より行われている教育課程の検証を行う。 | 教科、学年による検討 | 高２以上で自由選択科目が発生したことで、時間的にゆとりがある生徒が生まれた。今年度の高3生は、高１時の個人研究を継続し、大学総合型入試選抜に向けた取り組みを行い、学校推薦型選抜で受験をする生徒が昨年度よりも増加した。また、早い段階から教科を絞ったことで、戦略的に進路決定に繋げた生徒もいた。この取り組みは、これまで以上に高1時の文理選択の重要性を高めていくため、引き続き、学年会やアカデミア・進路指導部とも相談してより良い体制を築いていく。 | B | | |
| アカデミ | 【重点目標】一人一人が自分の将来をイメージし、学びたい学問を見つけ、希望する学府への進学を目指すよう、意欲を引き出す。 | | | B | | ・難関大学にチャレンジする生徒を増やす取り組みをして欲しい。<br><br>・総合型選抜を前提とした中学時からの準備指導を進めて |
| | 多様な学問の研究領域情報を提示し、将来的に自分が関わり、ライフワークの基盤となる学問を見つける機会を提供するとともに、大学へ進学することの意味を考える機会をつくる。 | オープンキャンパスの案内<br>学部学科・大学説明会の実施<br>その他各業者の進路雑 | 大学入学後・卒業後を見据え、自立した学習者であり続けるため、職業観や学習観の醸成を図る。10月・11月には、epassを仲介し、大学から系統別および大学の特徴を説明してもらう機会を設け、自分の興味を基に説明会を選択し参加した。<br>全学年対象であるが、特に高１は少なくとも１つ以上の会に参 | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア<br>進<br>路<br>指<br>導 | | 誌や大学情報の提供 | 加し、興味を深めるとともに、大学名だけでなく、学部・学科や専門分野についての知識の幅を広げた。 | | | | 欲しい。 |
| | 外部模試や講習を提供し、積極的な参加を促すとともに、定期試験や外部模試における振り返りをさせることで、最終段階である大学入試に向けた学力と精神面における自信の獲得を目指す。 | 定期試験や外部模試に向けての事前指導とリフレクションの徹底<br>高３生への大学別外部模擬の推奨 | ASGセンターと定期試験対策・振り返りの実践を連携し、外部模試の結果をもとに個別の学習面談を充実させた。<br>高１・高２では４月にスタディサポートを実施し、オンライン上で模試を受け、即時結果が返却されたため、素早く指導に反映することができた。また、高２希望者で２月駿台模試を受験した。主に一般型を念頭に置く生徒の受験機会となり、現在の実力と最終目標の差を明らかにし、学習戦略を見直すきっかけとなった。<br>高3で難関大学を志望する生徒には個別大学模試を斡旋し、学習戦略の意識を高めることができた。<br>全学年で夏期講習を実施し、I期は７月までの復習と夏期休業中の目標立てのため、II期は生活リズムを整え、９月へ向けて準備する機会を提供できた。学習に関する講座だけでなく、生徒の興味・関心を深める講座（わくわく講座）も設定した。<br>また、高２・高３では冬期講習を実施し、高３は共通テストへ向けて、高２は冬期休業中の学習についての計画を見直す機会を提供した。３月下旬には、新高３・新高２対象の春期講習が予定されている。春期休業中の学習を充実させ、新年度に向けての準備を進める一助となると考えられる。 | A | A | ・高校生とはいえ、まだ自分の方向性ややりがいをしっかり見出している生徒は少数派なので、様々な社会を見せることは重要である。<br><br>・一般選抜では横浜聖光の指導を取り入れて挑戦させてください。 |
| | 入試で様々な進路選択ができるよう、多種多様な受験方式に対応するための環境を整備する。 | 一般選抜の受験方式の情報提供<br>早期に総合型選抜、学校推薦型選抜の情報提供 | 総合型選抜で受験する生徒に、いつまでにどれだけの準備が必要であるのか、具体的なスケジュールを提供した。高３の受験準備期には、多くの教員が、面接やプレゼンテーションをサポートできた。今後、年内入試の数が増加していく予想もあり、担当教員・指導内容等、学内のシステムの整備と内容の充実の加速が必至である。高２の「総合」では、前年度に実施した個人研究を引き続き継続するコースを設けることで、自らの興味・関心をより時間をかけて深める活動を認めた。加えて、全員が志望理由書の作成をすることにより、自らの興味や今後の展望を整理し、進級後の学習計画を立てたり、研究内容や探究する中での経験をアピールしたりできるような基盤を整えることができた。<br>推薦型については、本年度より７月末時点で指定校枠の提示を実施した。それにより、夏期の面談で、生徒の関心のある大学を明確にし、どのような努力や準備が必要か、早期から考えることができた。<br>一般型の受験で、共通テストや２次試験を利用する生徒については、横浜聖光学院の小泉教諭に面談を依頼し、生徒の学習動機の明確化や学習計画のサポートを実施した。 | A | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 外部との連携を強化する。 | ASGセンターや個別指導に対し定期的な情報共有<br>横浜聖光学院教諭陣へ、講習の依頼<br>スタディウム・カンザキメソッドとの実施報告と情報共有 | ASGセンターとの連携について、センターから利用生徒の普段の様子や面談内容が担任と共有されている。<br>また、横浜聖光学院との連携については、高２・高１・中３で難関大対策講座を実施した。2026年度も実施する予定である。<br>また、高３放課後講習（一般入試対策講座）にも多数の教員が関わっている。加えて、本年度は１月より高２でも放課後講習（古文・理系物理）を開講し、通常授業内容のさらなる理解と応用のための視点を養うことができている。 | A | | | ・今日では特にキャンプなどそれぞれでお互いに健全な社会をつくらなければ、という働きかけが少なくなってきている。こうした努力をさらに築いていくことが望まれる。<br><br>・時に教育するに難しい年齢かもしれないが、個人の方向性、使命は人や社会を大切にする。ということに尽きる。平等や正義の尊さを目指すことに重点を置きたい。<br><br>・学内誌を活用することは有益と思われる。記録も残り、それぞれの個性が発表できる機会となる。 |
| | 自己と向き合い、他者や社会との関わり方について、経験を通じて学ぶ。また、そのスキルを体験的かつ体系的に学ぶ機会を設ける。 | 中学１年生LGキャンプ<br>中学２年生LGキャンプ<br>中学１年生「総合」<br>中学２年生「ゼミ」<br>中学３年生「ゼミ」<br>高校１年生「総合」<br>高校２年生「総合」 | LGキャンプは、他者と関わりを密接にも血、中1・中2での実施で自己理解・他者理解へ繋げる機会を作り出すことができた。<br>中１・中２・中３の総合とゼミについては、昨年度に引き続き聖光祭で発表会の機会があり、保護者や聖光祭参加者に生徒の成長を見てもらうことができた。また、高１の総合では個人研究を各々深める時間として使うことができた。課題設定に時間をかけ、自分の関心がより反映できる問いの設定を促した。<br>高２の総合では、今年度は自らの興味・関心をさらに突き詰める時間として設定し、「資格取得（英語検定など）」「個人研究継続」「学内イベントの充実」のコースに分かれ、聖光祭での学年展示を目指すなかで、自分自身の興味・関心の深掘りにつなげることができた。 | B | | | |
| | 自己実現の方向性を考える経験を通して、自らの抱く使命感とその領域性を広くまたは深く模索する機会を設ける。 | 高校１年生キャリアキャンプ<br>高校１年生個人研究<br>Inspire Highの利用 | キャリアキャンプは、生徒がメタ的視点で自分自身の経験や価値観を掘り下げて興味関心を探り、個人研究に接続する意図で行った。株式会社ミエタと連携してプログラムをつくり、生徒が自分の価値観や経験を掘り下げるワークや、仲間とともにひとつのことを成し遂げる経験を積み重ねるため登山を行なった。４月から「自分の歩みを振り返り、自分は何者であるか」等の問いかけを中心としたワークを「総合」内で行うことで、昨年度の課題であったキャンプ当日へ向けての意識付けを行うことができた。その後の個人研究では、昨年度に引き続き「個人活動」と「グループ活動」を認めた。７月の構想発表会後も課題や問いの設定に時間をかける生徒が多く、１年間の見通しをもつことが難しい生徒が多い様子であった。３月の「学びの発表会」は高２での学びに繋げられる機会としても設定し、現状の研究結果を報告し、そこから得た学びを他者へ伝えるなかで、研究活動を振り返ることができた。<br>Inspire Highを中学１・２学年で導入し、多くの世界で活躍する大人の価値観に触れることで、自分の価値観に気付き、それを言語化する活動を総合の時間内で行うことができた。保護者も参加可能な発表会も中２で実施された。 | B | | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 文化的雰囲気の醸成と、生徒の個性・研究成果をアウトプットし、フィードバックを得る機会を設ける。 | 学内誌「静聖」の発刊<br>静聖委員会の組織と実施<br>プロジェクト（生徒主導の課外活動）の実施<br>（自然科学賞候補者発表会の開催）<br>（自然科学賞の受賞者の表彰）<br>→理科が主導で実施している | 静聖刊行の目的は「文化的雰囲気の醸成と、生徒の個性・研究成果のアウトプット」であり、その達成のため、高２が中心となり既に委員会活動が活発に行われた。４月より始動し、既に特集テーマに関する記事や体育祭などのイベントについての記事が集まり、文章を確認する作業に入ることができている。<br>個人研究については、論文形式のものが成果物として残っていた。また、高１までの活動であった昨年度までと異なり、外部プロジェクトに参加した内容をまとめ直すなど、静聖用のフォームに体裁を整え直すことに時間を要した。<br>今年度のピエール・ロバート賞は、高３生と高１生に授与される。 | B | | |
| | 生徒のコンピテンシーを育てるための評価のあり方と、その方法論を教員が学び、実践し、教員間で研鑽する機会を設ける。 | 教員研修の実施 | 「学びに天井をつくらない」「生き方を創造する」というビジョンを達成するために、昨年度から「学びに天井をつくらないための授業づくり」と、「生き方を創造するための指針（ルーブリック）の作成と運用」を主な観点に置いている。筆記試験等により正誤で測定できる知識・スキル以外のコンピテンシーを育て、評価するための仕組みを学ぶことで、多様化した受験方式に対応するだけでなく、生徒自身の自己理解やその先の学びに繋げる必要がある。<br>今年度は研修という形が取れなかったが、日頃より教員間で連携し、評価内容や評価方法が見直されている。 | B | | |
| 生徒指導 | 【重点目標】【重点目標】〇真摯な態度　～自分を大切に　他者を大切に　他者のためにひたむきに努力をする～ | | | B | B | ・教師間や保護者、そして何より生徒とのできるだけ深いコミュニケーションが必要と思われる。こうした努力を続けて欲しい。<br><br>・AIの存在を前提とした生徒指導をお願いしたい。SNS対策と違いAIは積極的に活用すべきである。産業界ではこの半年で急速にAIが浸透しており課題解決力よりも課題設定力が問われている。<br><br>・自転車などの事故対応は特に必要と感じる。ルールも厳しくなっているため、さらなる努力が必要と感じる。 |
| | 発達指示的生徒指導を実践し、生徒が主体的に学院生活を送ること。<br>生徒が成長に自らの気づき自己肯定感を持つこと。<br>生徒が将来のために自分で行動を選べること。<br>そのように成長していく風土を醸成する | 教員間で指導方法の議論<br>ケーススタディの実施<br>研修会の参加<br>クラス委員の充実 | 単に注意で終わることがないよう、生徒の心に寄り添いながら指導ができる機会が増えている。指導の際に、生徒達の考えを引き出すことや、生徒が他者の心情を想像することができるような発問が指導の中で増えている。<br>クラス委員会ではクラス委員から全体に問題提起をする場面や、教員との意見交換で得た情報を全校集会や各HRで話や生徒からの啓蒙活動をする機会が増えていた。特に中学生が高校生の話を聞ける機会は貴重であったようだ。<br>発達指示的生徒指導は、過去に横行していた教員の価値観に生徒をはめ込むものとは反対方向のものであること、また、生徒一人ひとりの現在地を正確に把握する必要がある指導方法であるため、教員が生徒目線に立つことが重要である。目の前の生徒に関わる全ての教員が日々の生徒の成長に気づきけるような指導ができるようスタンスを揃えていく必要がある。<br>生徒が自分の現状を把握することが苦手な様子であるため、生徒が自分の行動や習慣を振り返ることができる機会を用意する必要があるように感じる。また、その記録を活用し、日常の指導だけではなく、家庭面談等に活用し、保護者の皆様にも生徒 | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | の成長について根拠を持ってお伝えできるようにしたい。 | | | | ・「いじめ」については指摘の通り定期的にその罪の深さを訴えることが大事である。 |
| | 交通安全指導の充実を図り、生徒の登下校中の安全を図ると共に、指導を通して公共場所での振る舞い、他者を気にかける心を養成する。 | 街頭指導<br>交通安全教室の実施<br>地域からの声の共有<br>スクールバス乗車指導 | ４月に交通安全教室を日本交通安全教育普及会に依頼をし、自転車の事故の予防、交通ルールの遵守、公共場所（道路・駅・電車内など）の振る舞い方についてご指導を頂けた。また、その機会では単に講演だけではなく、ワークショップ型で生徒が自分事として考える機会を得た。<br>その他、定例での巡視、定期試験期間中の下校指導を充実し、生徒が集中して下校するタイミングで地域の方々にご迷惑にならぬよう指導をし、またその必要性を生徒に伝えることができた。<br>その一方で自転車での交通事故が起きた際、十分な対応を取らずに現場を後にした生徒が複数名いることを確認した。事故対応を十分周知し、自分・相手の安全に努めるよう引き続き指導が必要である。また、そのようなケースを他の御家庭にも時間をあけずにご連絡するべきであった。 | B | | | |
| | 非行防止（いじめ・薬物乱用・飲酒喫煙の予防、携帯電話等を含むインターネットモラル向上）指導に努める。 | 生徒指導研修の実施<br>生活・いじめアンケートを活用した個別面談の実施<br>指導点検日の設置<br>外部講師を招いた講演活動<br>警察との連携 | いじめ指導の研修を全教職員に実施し、「認知」と「認定」について積極的な指導をすることができた。<br>学校生活で起きたトラブルを警察機関である「少年サポートセンター」と密に連携をし、アドバイスを頂きながら指導を計画することができ、生徒の失敗に対し、再発防止を目的とした指導で一定の成果があったように感じられる。<br>インターネット安全教室・薬物乱用セミナー等で外部講師をお招きし、社会情勢に合わせた指導を行うことができた。（一部保健部発信）<br>インターネット・スマホの指導は全体指導だけでは効果が持続しない。学年やクラスに応じて指導を継続する必要を感じた。<br>また、指導の材料（ニュース等）を教職員がアクセスできるデータベースがあると尚良いように感じる。 | B | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 宗教教育 | 【重点目標】カトリック精神に則り、横浜教区と連携しながら、生徒の心の成長を目指す | | | | | | ・典礼、祈り、ミサの目的は何より「人を大切にする」「平等」「平和」の重要さを認識してもらうことにある。カトリック的な上記方法論も大切にしながら何らかの形で「愛」「正義」「平等」「平和」を訴える機会を豊にしていきたい。 |
| | カトリック精神に則り、横浜教区と連携しながら、生徒の心の成長を目指す<br>①　典礼に基づく活動 | 祈りの時間(月１回) | 月１回の実施。聖書の言葉、教職員のメッセージ、聖トマス・モアと故ロバート先生の紹介、広島巡礼と長崎を訪問した高校生平和大使の活動報告など。 | A | | | |
| | | ミサ(月例、全校、中学高校卒業、卒業生二十歳の祝い)<br>みことばのつどい(中学１年生聖書授与) | ・月例ミサは、聖書研究会の生徒を中心に参加。濱田壮久師が折々の学校の動きに寄り添い、説教と祝福をしてくださっている。<br>・聖トマス・モア全校ミサは、チャプレン古川勉師の司式で行われた。聖モアと帰天後20年のロバート先生、そして世界の困難の中にある人々に向けて聖光生のミッションを祈った。 | A | | A | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | ・『みことばのつどい・聖書授与式』は、聖堂オラトワールで行われ、多くの新中1生にとって初めての、イエスとキリスト教カトリック、聖書との出会いの場になっている。 | | | | ・教会関係の様々な機会を利用することは生徒にとっても経験の幅が広がり教会にも触れる機会となるため良いことである。 |
| | | 生徒・職員・保護者向けの宗教的企画・活動 | ・週１回昼休みの聖書研究会を各学年で行った。聖光祭で「静岡聖光とブラザーたち」を発表。<br>・『聖年』かつ終戦80周年。広島ノートルダム清心中・高等学校さんのお誘いを受け、8/5(火)～8/7(木)広島で行われた平和記念式典に、中１から高２の有志16名と引率２名が参加した。平和記念公園と資料館の見学、平和記念聖堂での2回のミサと記念公園内の３宗教合同の慰霊式や『平和を考え語り合う』ユース・プログラムに参加。ノートルダム清心も訪れ交流した。<br>・静清地区教会学校リーダー会主催の『教会学校サマーキャンプ』に５名の生徒(未信者)が参加。近隣の５教会から延べ40名が集まり、『聖年』や教皇、平和について学び祈った。<br>・チャプレン古川師の聖書講座を３回実施。<br>・職員研修は陰山昌弘先生の講話<br>『ひとりひとりに寄り添って』を実施した。 | B | | | ・今後も病院、老人施設、障害者施設などますます社会の弱い立場に置かれた人々との接触を増やすことは大変有益である。<br><br>・「何のために生きるのか」という根源的な問いかけをストレートに語る時間をぜひ作って欲しい。 |
| | ②委員会、ボランティアなど | 宗教活動委員会の充実 | クリスマスの準備<br>クリスマスカード書きと送付、イルミネーションの設置作業と点灯式の運営をした。点灯式は今年も100名近くの皆様が集まり、盛況。宗教活動委員はもちろん有志生徒・職員とラグビー部、吹奏楽部の尽力でつくりあげた。<br>カードは、市内３つの総合病院、県立こども病院、近隣のこども園やお年寄りの施設、かかわりのある学校や教会施設に届けた。 | A | | | |
| | | 生徒活動としてのボランティア | ・静岡県主催『東北被災地訪問研修』へ、高２生２名が参加。聖光祭でのプレゼンテーションと『祈りの時間』で発表し、防災について当事者として考える機会とした。<br>・中３生の有志生徒が夏休みに補助犬を養成する施設を見学。聖光祭で発表と盲導犬育成のための募金活動をした。<br>これを機に２年ぶりに静岡市駿河区の社会福祉協議会と連携を再開した。中３のカトリック倫理で多様な生き方を学ぶため盲導犬ユーザーさんを招き、事前学習から振り返りまで行った。<br>「利他の精神」と「見えない人も安心安全に暮らせる社会」について考えることができた。 | A | | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 聖歌隊の編成 | 教員５名と生徒１名による『アヴェ・ヴェルム・コルプス』をイルミネーション点灯式・クリスマスミサ・高３卒業ミサで披露。 | A | | |
| インターナショナル | 【重点目標】多様な留学・交流機会を体系化し、誰もが参加できる国際教育環境を通じて、生徒のグローバルな視野と協働力を育成する。 | | | | A | ・AIによる自動翻訳を積極的に使って言語のハードルを下げて活動に使う時間を増やして欲しい。<br><br>・提携校の広まり、深まりを進めることは有益となる。<br><br>・積極的に他国の文化・言語に触れる機会を持つことが出来る良い取り組みである。 |
| | 長期留学生受け入れ・支援体制の強化<br>目標：５名以上の長期留学生を受け入れ | ・AFS留学生とアジア架け橋生の受け入れ<br>・日本語教育カリキュラム・大学進学サポートの充実<br>・ホストファミリー登録制度の推進 | 6名の長期留学生を受け入れ、数値目標を達成した。一方で、1名が途中帰国となり、生活適応や学習意欲の維持に課題が見られる事例もあった。日本語能力試験（JLPT）については2名が合格したものの、全体として到達度にばらつきが見られた。来年度は受け入れの「量」だけでなく「質」をさらに高めたい。 | A | | |
| | 海外提携校との交流拡大 | ・MOU校（Vajiravudh College, CRPAO School, Sacred Heart College Auckland）との交流拡大<br>・ブルネイのISBとのMOU締結 | 既存MOU提携校との関係は継続的パートナーシップへと深化しており、ブルネイISBとのMOU締結により、国際ネットワークのさらなる広がりを実現した。次年度開催予定の本校「国際サミット」を交流拡大の中核事業として位置づけ、既存提携校との連携深化および新規提携候補校の開拓へとつなげる体制を整えたい。 | A | | |
| | 誰もが参加できる国際交流イベントの推進 | ・イタリア・マルコ・フォスカリーニ高生徒８名・教員２名の受け入れ（9/20～10/1）<br>・ラグビーを通じた国際交流<br>（オーストラリア、ニュージーランド、マレーシアなど）<br>・欧州校との「やさしい日本語交流会」継続<br>・第３回「国際未来共創サミット」開催準備 | イタリア・マルコ・フォスカリーニ高校を受け入れ、模擬国連形式の国際討論を本校で実施した。本活動はその教育的意義が地元紙に掲載されるなど、地域社会への発信という点でも成果を上げた。ラグビーを通じた国際交流においては、オーストラリア・タウンズビルU18チームの受け入れや、３年連続となるマレーシアMCKK遠征を実施し、スポーツを媒介とした継続的国際交流の枠組みを確立した。「やさしい日本語交流会」も生徒主体で継続開催し、英語力に自信のない生徒を含め幅広い層が参加できる環境を整備した。次年度開催予定の「国際サミット」を通じて、学校全体を巻き込む国際教育展開の基盤を構築したい。 | A | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 海外研修旅行・ターム留学の体系化 | ・既存の海外研修の継続と質向上<br>・Sacred Heart College Auckland とのターム留学制度確立・開始<br>・事前研修・事後学習の体系化（文化祭展示含む） | ターム留学制度を正式に実施し、短期２名・長期５名を派遣したことは大きな成果である。<br>一方、昨年度までに海外研修企画を拡充した結果、本年度は応募状況にばらつきが生じたため、企画の整理・再編を行った。<br>持続可能性を重視する観点から事業内容を精選し、事前研修・事後学習を体系化することで、「量より質」を重視した国際教育プログラムへと再構築したい。 | A | | | |